



テイカカズラ (キョウチクトウ科テイカカズラ属)

一粒で二度おいしいというキャラメルがありました。テイカカズラもそうです。最初のおいしさは、5月末になると咲き始めるその花です。黄色い軸に純白の5枚羽根の小さなプロペラが付いたような花が、散生して、流れ落ちる滝のように咲いているさまは息をのむ美しさです。滝のようになるのは、それがつる性植物だからです。高い樹上から絡み落ちるつる植物ならではの芸当です。雨あがり、鎌倉の散在が池の森で見たそれは素晴らしいものでした。

二度目のおいしさは、その果実にあります。

写真のように二股になった果実がぶら下がって付きます。熟すとそのサヤが縦に割れて中から銀色の羽を付けた沢山の種子が飛び出すのです。晩秋に山歩きをすると絹毛のようなものがふわふわと飛んでいるのを見かけます。それはテイカカズラの種かもしれません。希望を託して子孫を飛ばす生命力に感動を覚えます。

大野台小学校林のミズキの大木に絡まっているテイカ



カズラ
は緑道

から見上げることができます。規模は小さいものの、私のお気に入りのスポットです。花 1 の写真はそこで撮ったものです。小さな葉の対生したツルが木の幹を、付着根を出して這い上がります。花が咲くにはかなりの大きさになる必要があるようです。小学校のテイカカズラも相当のボリュームでミズキに絡まっています。この絡まるテイカカズラの姿がその名前(定家蔓)の由来なのですが、話が長くなるのでそれはまたの機会にしましょう。(鳥飼)



こもれびの森の外来種植物

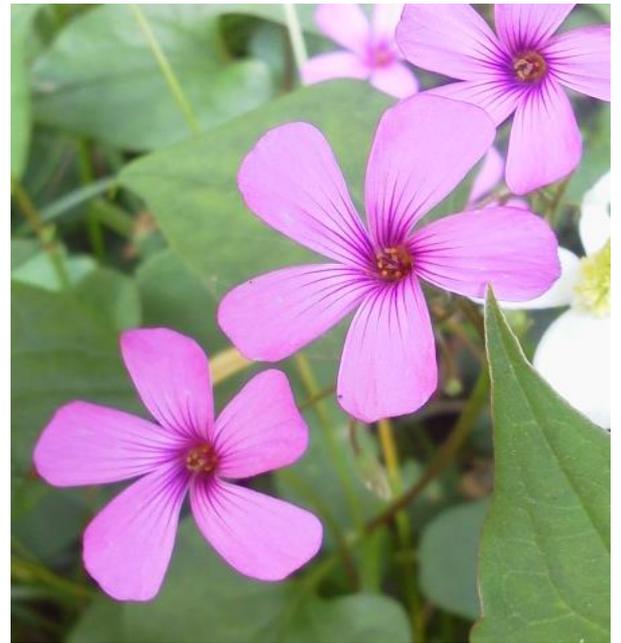
イモカタバミ (カタバミ科カタバミ属)

森の中を散策していてピンクの花を見つけると、あっ何?と思わず心がときめきます。緑の森を背景にピンクに輝く花を見つけると、なぜあんなに嬉しくなるのでしょうか。春の初めに丹沢の山中で出会ったミツバツツジのピンクは本当にその通りで、生命の力強さを感じました。

こもれびの森を歩いていると写真のような美しい花に出会いました。遠くから見ると、白山フウロのような美しさです。でも近づいて観察すると、ハート形の3小葉でした。カタバミの仲間です。これはムラ

サキカタバミかイモカタバミです。花の中心部に黄色い雄しべが見えていますから、イモカタバミでしょう。ムラサキカタバミなら雄しべは白っぽく、花粉がついていません。

念のためにその根を確認させていただきました。すると写真のように小さな芋のような塊茎がついていました。これは間違いなくその名の由来となったイモカタバミです。ムラサキカタバミなら百合の根のように鱗茎を作ります。



イモカタバミは戦後になって入ってきた南米原産の多年草です。こもれびの森のイモカタバミは誰かが置いていったのでしょうか。

カタバミ属の学名オキザリスはシュウ酸という意味です。この葉っぱを摘んで汚れた10円玉を磨くとピカピカと光ります。これはシュウ酸の効果です。(鳥飼)

木もれびの森の虫たち-8-

また緑豊かな季節が巡ってきました。昨年大発生したキアシドクガが今年も森の物置広場にあるミズキの周りを一見モンシロチョウの如くヒラヒラと舞っている姿が見受けられます。ドクガといっても毒はないそうです・・・どうしてドクガという名前をつけてしまったのでしょうか。ミズキの葉をたべて育ちますが、大した被害はないようです。純白の姿と気ままに漂う様子を観察してみてください。さて、植物の茎や葉の裏に泡の塊を良く見かけます。この泡のなかには、アワキムシの幼虫が住んでいます。アワキムシはセミを小さくしたような昆虫です。植物



キアシドクガ表



蛹抜け殻



キアシドクガ裏



泡シェルター



泡シェルターの主



から吸った導管液と自らの排泄液に含まれる脂肪やアンモニアで石鹼水のようなものを作り、おなかの気門から出す空気によって泡立っているのです。幼虫は脱皮するたびに移動し泡を作り直します。この泡のシェルターは少々風雨にもビクともしない丈夫な優れたものです。(海野)